

古代アンデス文明 上野に現る！ 意外なミイラの真実



発行所
群馬県立富岡高等学校
群馬県富岡市七日市1425-1
TEL 0274-63-0053
発行人 / 田村浩一
編集 / 新聞部

miniプレス

国立科学博物館
特集号



ナスカで発掘されたミイラ

■エジプトよりも早い「ミイラ」
インカ帝国には、死後もミイラとして生き続けるという、ミイラ信仰があった。それは死者がミイラとして残っ

ていけばいつまでも子孫を守ってくれると考えていたからだ。アンデス文明のミイラはミイラ文化で有名なエジプトよりも早く、七千年前にはすでに意図的

10月20日金曜日、抽選に選ばれた富岡高校新聞部と古河中等教育学校文芸部の二校が国立科学博物館で開かれた「古代アンデス文明展」(2017年10月21日(土)から2018年2月18日(日)まで)の報道関係者内覧会に取材へ行った。内覧会では、金の装飾品やミイラ、仮面、土器、織物などの日本初公開の物を含む歴史的に貴重な資料がショーケースに展示されていた。また、アンデス文明の様々な文化や歴史的な遺跡についての映像の放映、VRの体験ブースなどが設けられていた。



監修者の(左から)鶴見英成さん、篠田謙一さん、島田泉さん

に加工したミイラが多く作られていた。しかしそれを16世紀よりも後の時代にスペイン人がミイラを燃やしてしまっただが、今もなお残っているものも数多くある。特に、チリバヤ文化の遺跡からはセントロ・マルキ研究所によつて、600体ほどのミイラが発掘されている。

■「魂はミイラの中に」
ミイラの風習は広くアンデス社会に根付いていった。加工の技法にも主に頭部にバリエーションを持っていた。ミイラを観察した時に最も目立つのは、変形や大きな穴が見られる頭骨等だ。この事から

アンデスの人々は頭部に特別な関心を持っていたことがうかがえる。また、アンデスではミイラ包みが作られていた。ミイラ包みとは布やひもなどを使い梱包されたミイラの事。死後の世界での生活に必要なものであるという考えから、ミイラには職業や社会的な役割を反映した多くの副葬品と一緒に置かれていた。ミイラになるのは若者男女を問わず、誰でも死んだらミイラとして埋葬された。

田謙一さんは「紀元900年頃から1440年頃に栄えたチリバヤ文化では、ミイラを時々墓から掘り起こして、衣服を着替えさせることもあったと言われている。例えばインカの王は、死後もミイラとなつて家臣の領地を回っていたと言われている。また、アンデスの人々は死んでしまうと話さなくなるだけで、魂はミイラの中にあると考えていた。アンデスの人々は死者と密接に生活していた」と熱く語った。

「魂はミイラの中に」
ミイラについて、篠田謙一さんは「魂はミイラの中に」

「魂はミイラの中に」
ミイラについて、篠田謙一さんは「魂はミイラの中に」

「歴史を感じた」
来場者にインタビュー
今回一緒に取材した古河中等教育学校の文芸部員は「参加した理由は、先生からの紹介で、国立科学博物館は一般客として来館したことがないので楽しそうだなと興味を持ったから。前回参加した時は深海のことだったので、説明が難しいところもあったが、今回はアンデス文明のことなので、理解しやすい部分があった。また、アンデス文明のことは世界史の授業などで触れ

「歴史を感じた」
来場者にインタビュー
今回一緒に取材した古河中等教育学校の文芸部員は「参加した理由は、先生からの紹介で、国立科学博物館は一般客として来館したことがないので楽しそうだなと興味を持ったから。前回参加した時は深海のことだったので、説明が難しいところもあったが、今回はアンデス文明のことなので、理解しやすい部分があった。また、アンデス文明のことは世界史の授業などで触れ

ていたので多少の理解が出来てよかった」と安心したように話してくれた。また、「今回はアンデス文明という1500年分の過去の事だったので人類の歴史を感じた」と楽しそうに話してくれた。

今回お世話になった国立科学博物館の担当者「高校生に取材してもらおうとしたきっかけは、来館者の中で高校生が少ないため、



VR体験をする本校新聞部員

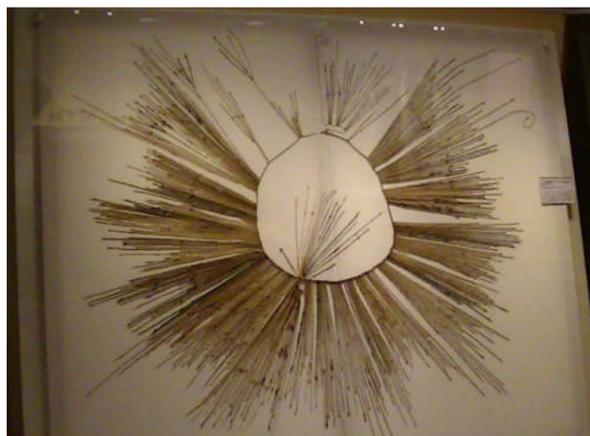
高校生が取材して、その新聞を見聞きしてさらに多くの人に来館してくれるようにすること」と話してくれた。VRを体験した本校新聞部員は、「風景はウユニ塩湖で山や空などの背景がとても綺麗でリアルだった」と話していた。

情報伝達の役割

キープ

高度に文明化されたインカには文字がなかった。そこでインカの記録技術、伝達手段という役割を担ったのがキープだ。キープは色やテクスチャー、素材などの異なるひもに様々な種類の結び目を作ることで、情報を記録できた。キープは、7世紀半ばから10世紀後半のフリ帝国の時代には既存していた。キープについて島田泉さんは「キープは基本的に十

進法を使っていて結び目の数、場所によって表されている数量、意味が違う。インカ帝国には、キープを教える専門の学校までありキープをマスターした専門家がいた。専門家はキープを「読んで」、インカ王室の歴史をスペイン人に語って聞かせていた。キープは16世紀半ば頃から記録があるが、未だ解読はされていない」と真剣に語ってくれた。



インカ帝国のキープ

位置とタイプにより十進法に基づく数字が表されている。

十進法とは、今日の日本でも使われている数法で0から9の数字が用いられている。キープは基本的に主軸となるひもから多数

のひもがぶら下がっている構造で、結び目が作られるのはぶら下がっているひもの特定の場所、結び目の数は、最大で9個。結び目の位置とタイプにより十進法に基づく数字が表されている。